



2013年新春特別号 2013年1月15日
東洋英和女学院大学図書館

ブッククラブメンバーが聞く！

教員インタビュー第二回 村上学長

昨年十一月末、ブッククラブの五名が村上学長にインタビューをさせていただきました。

学生時代の読書から、読書を更に深める体験や芝居鑑賞について、若い世代への思い等々…

村上学長とブッククラブメンバーによる、読書を軸にした素敵な対話。英和に関わる全ての方、必見です。

◎村上先生 ●ブッククラブメンバー

●人間科学部人間科学科三年の内田弘美です。好きな本は桜庭一樹さんの本です。

●人間科学部人間科学科三年の高橋礼華です。最近読んだ本は絵本で、『たいせつなきみ』という本です。

●人間科学部人間科学科四年の足立亜利沙と申します。最近読んだ本で特に印象に残っているのは、ヘルマン・ヘッセの『メルヒェン』です。

●人間科学部人間科学科四年の藤田啓子です。一番好きな本は恩田陸さんの著作です。

●人間科学部人間科学科四年の山本ありすと申します。最近読んだ本で印象的なのは、竹内敏晴先生という演出家の方が書いた心理学についての本で、とても面白かったです。

◎アリスは読まないのですか？

●アリスも大好きです。(笑)

●先生は学生時代、どのような本を読んでいらしたのか是非知りたいのですが、できればいくつか教えて頂けますでしょうか？

◎学生時代というのは、大学の学生時代ということでしょうか。私が大学生の頃というのは、大学へ入った時には、ほぼ自分が将来何をやるかということに関しては、大体目処が付いていたので、まず一番読まなくては行かなくて読んでいたのは、自分がこれから進む科学の歴史や科学の哲学というそういう分野の書物たち。私たちの場合

は一・二年生がいわゆる教養課程で、必ずしも専門教育というものに立ち入らない段階なのですが、それでももう自分が目指している学問をかなり読み始めていましたから、そうすると専門書になりますので、あまり皆さま方には参考にならないかもしれない。ではそれ以外に何を読んでいたかということ、小学校の三年生くらいから始めて、『漱石全集』¹というのは繰り返し繰り返し読んでいました。小説ばかりではなくて、岩波からこれまでに漱石全集というのは四～五回くらい出ていて、今一番新しいのはすごくたくさん後ろに註や校定がついているものですが、その前の前の版というのを父親が持っていて、それを取っ替え引っ替え、評論も読みました。小学生でしたので読めないものもありましたが、英語の論文や英詩もありました。



他の自分の読書遍歴でも書いてしまったのですが、私の人格の何十パーセントかは漱石で出来ているという感じなのです。そういう点では、大学へ入っても漱石は手放

さなかつたと思います。それから翻訳では、ヘッセをお挙げになったけれども、『デミアン』²など、ヘッセに読み耽っていたのは中学から高校生の頃だったと思います。

●日比谷高校時代ですか。

◎そうですね。今でもヘッセは人気がありますね。本屋さんに行くと、大抵必ずあるものね。

●私は本屋でアルバイトをしているのですが、聞かれると必ず在庫があります。

◎それは何故なのかな。ちょっと分からない。それから、これは高校生の頃が主なのだけど、翻訳物で長いものというのは、高校生の頃から大学の初年度の頃ですね。トーマス・マンの『魔の山』³とか、それから『選ばれし人』⁴という小説があってね、これは大変面白い小説だから、皆さんにお勧めします。

●はい、ぜひ読んでみます。

◎内容は…読む時楽しんで下さい。私はマンの小説のなかでは、むしろ『魔の山』より好きな小説です。割合長いですけどね。翻訳にして一冊ですけど、かなりのものですね。それから、我々の世代ですとドストエフスキー。今は亀山さんの訳で、ドストエフスキーが再燃してここ十年ほど経っていますけど、我々の世代ではドストエフスキーは読んでおかないといけないというので、『カラマーゾフの兄弟』⁵にしても、『罪と罰』⁶にしても読みました。

あとフランスものでは『チボー家の人々』⁷。長くて一冊では収まらないようなものは、やはり夏休みに籠って通して読みました。やはりああいうものは長くて、それなりの時間がかかるので。それから、割に今はまともな話をしたのですが、大学に入った頃、奨学金を貰うと、丸善に飛んで行きました。丸善に飛んで行って何をするかというと、その頃洋書というものは丸善にしか売ってなくて、何をかうかという、多分皆さんに言っても分からないと思うけれども、ミッキー・スピレーン。『My gun is quick』⁸というタイトルで、『俺の拳銃は素早い』⁹という日本語訳も出ていると思うのですが、ペーパーバックです。外は内容とはあまり関係のない、けばけばしい、ちょっと肌も露わな女性が出てきたり、そんな本なのですけどね。それから“007”がまだ映画になる前に、これが私の自慢なのですが、つまり本の段階で『007』¹⁰の本を読み始めたら止められなくて。それから、ミステリも私の趣味としては、大学生時代はよく読んでいましたね。ハヤカワミステリーポケット版、ポケミス、ポケミスと言われているもの。それから創元推理文庫という、創元社から出ている翻訳が主です

が、この二つが一番お世話になった出版社です。それから、新潮社から何度か出ていますが、“世界文学全集”という類のもの、ロレンスの『虹』¹¹だとか、ジュール・ロマンの『プシケ』¹²だとか、それから、『月と六ペンス』¹³。

●サマセット・モームさんですね。

◎そう、モーム。おっしゃる通り。『月と六ペンス』だとか、そういったものも世界文学全集の中に入っていたので、手当たり次第読んでいました。

●先生は宮沢賢治もお好きですよ。

◎はい。賢治はむしろ小学校の頃に一番たくさん読みました。私の小学校の担任の先生がケンジアンというか、宮沢賢治マニアであった影響もありますが、母親が私に与えてくれた、小学校から中学にかけての書物の中で、一番多かったのが宮沢賢治のものでした。いわゆる童話と言われているものの中で、『グスコブドリの伝記』¹⁴ですとか『風の又三郎』¹⁵というのは、一つの作品なのだけれども、『風の又三郎』という本の中に十編くらい、『グスコブドリの伝記』の本の中に十編くらい、色んな童話が入っている。例えば、『雁の童子』¹⁶とか、『ありときのこ』¹⁷、『月夜のでんしんばしら』¹⁸とか、『どんぐりと山猫』¹⁹とか、『饑餓陣営』²⁰というなかなか面白い、芝居の脚本のようになっている作品や、『北守将軍と三人兄弟の医者』²¹とか、とにかくめったやたらに読んでいました。『春と修羅』²²のような、かなり深刻なものは高校生に入ってから読みました。だから大学には行った時は、もう“卒業”という言葉は悪いのですが、漱石の場合は子どもの時から大学の時まで引きずっていましたが、賢治の場合は、大学に入った時はもうちょっと良いかなと、こっちの方に置いてあったような気がします。でも、何かに書きましたけれど、漱石からは、自分を含め人間をどう見るか、賢治からは自然をどう見るかということを学んだような気がしますね。『ゼロ弾きのゴーシュ』²³もあった。

●先生のご著書の中に、読書というのは、本を読むのと体験も同時にして、自分というものが出来ていく、という文章がありました。同じ様に、芝居や音楽や様々なものも、体験と一緒に自分ができてきたということでした。私は今、演劇をしており、卒業してからも付属の大学院に通いながら演劇で食べていけたらと考えています。お芝居などをみた時に、体験や印象に残っている作品があれば教えて頂けないでしょうか。

◎芝居ですね。私が幼児から体験していた芝居というの

は、いわゆる現代演劇ではなくて、まずは歌舞伎と能がありました。私が子どもの頃は、祖母が大の歌舞伎好きで、ほとんど毎週のように出掛けていまして、それに御相伴で連れて行ってもらった時には、先代の吉右衛門、今は二代目かな。歌舞伎役者で今一番まともなのは吉右衛門だと思っていますが、その吉右衛門の先代にあたる人ですね。吉右衛門は初代です。それと、五代目と言われている菊五郎、今の菊五郎ではないですよ。その頃から「菅原伝授手習鑑」とか、様々なお芝居を見ていました。そして、これも今の松緑ではなくて、前の松緑ですが、いわゆる「赤毛モノ」といわれる、ヨーロッパのお芝居を日本人が赤毛のかつらをかぶって演じる“赤毛モノ”。いわゆる新劇といわれているもの、まだ俳優座の段階ではなくて。そこでは、エドモン・ロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」という芝居、これは何度も観たし、芝居としては私が一番好きな芝居であります。それは何故かという、これも小学校四年の時に読んだのですが、辰野隆と鈴木信太郎というフランス文学の巨頭といわれるお二人。二人とも私は習えなかったのですが、東大の仏文の大先生だった方々が、エドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』²⁴を翻訳されたものがありまして、これは名訳なのです。本当に面白い訳なのです。今は岩波文庫の中に入っています。実は最近になって、光文社が新訳文庫というものを出版して、渡辺守章という私より少し先輩にあたる方で、彼はフランス文学ですが、ずっと円というグループの芝居に関わっている人ですけど、その渡辺さんがごく最近、二年くらいになりますが、新訳を出しました。これもなかなか面白い訳ですが、私は辰野・鈴木訳で、未だにほとんど言葉も覚えているくらい何度も読みました。もちろんチャーホフとか、『かもめ』²⁵や『三人姉妹』²⁶もそうですし、いわゆる定評のある芝居というものは新劇の中でいくつか見ていまして、高校のときに割によく行っていました。後は、能・狂言ですね。能は四歳からずっと自分でやっていたので、その頃の名人と言われる人たちの舞台も随分見ました。もともと観世鉄之丞(かんぜつてつ)のじょう)といわれていた人で、後で華雪(かせつ)さんと名乗る、昭和の名人と言われる人の舞台も何度も見せてもらいました。これは目に焼き付いて残っていますが、そういうものが自分の中でどういう風になっていくのかというのは、人様々ですからね。どういう段階で、どういうコンテキストで見ているかということとも絡むでしょ。ただやはり芝居にしても本にしても、さっき経験ということを言われま

したが、自分で経験したことだけで人間は生きていく訳では無くて、本だとか芝居だとか、何でも良いのです、落語でも良い。私は落語が大好きだから。そういう、自分以外の人が経験したことを、色んな形で話してくれていることを、耳から目から経験することによって、自分というものが広がっていくということは、はっきりしています。自分が経験できなかったことでも、ちゃんと本の中では経験できる。それと、よく言いますが、映画も好きでよく見えますが、映像、テレビジョンも含めて、映像の限界というものがあるわけですよ。例えば、文字として「美しい人」という表現が出てきた時に、私は自分の中で、自分の理想とするような美しいような人を思い浮かべられるわけですが、映画だと、吉永小百合が出てくるか、前田美波里が出てくる。古いですね(笑)。とにかく、その人に決まってしまうわけです。そこからもちろんある程度イメージは膨らむにしても、自由度が映像では限られてしまうわけですね。生身の芝居でもある程度そうで、田村正和がやっていたら彼の魅力はあるけれど、彼の何かであるということになってしまうわけです。そういう意味では本で読む、文章で読むということは、また特別な意味があるような気がしますね。

●ありがとうございます。今お話された本は是非読んでみようと思います。

●日本アスペン研究所のジュニアセミナーで、テキストとしている古典の本には、何を使っているのか教えて頂きますか？

◎日本アスペンのジュニアというのは、高校生のために開かれている読書会みたいなものです。そこでは、森鷗外の小説で『かのやうに』²⁷という小説。森鷗外は秀麿物といって、秀麿という主人公が出てくる短編～中編のものをいくつか書いているのですが、その中でも代表作と言われている作品。それと、ソポクレスの『アンティゴネー』²⁸。これは芝居をやる人はよく分かるでしょう。あちこちで芝居になりますので。もちろん全部は読めませんが、大事なところをかなりのページに渡って使います。それから、これはあまり日本では読まれていないので特にそれを選んだのでしようが、プロティノスという三世紀くらいの、ローマ時代を生きていた、いわゆるネオプラトニスト、新プラトン主義派といわれている人が書いた『エネアデス』²⁹という作品があります。あとは、『旧約聖書』の『創世記』³⁰、福沢諭吉の『文明論之概略』³¹。これも福沢の代表作。

『学問のすゝめ』³² はあつという間に読めてしまうのですが、『文明論之概略』はもう少し骨のある長いものです。あとはカントが晩年に書いた『実用的見地における人間学』³³。この六本を一日二本、三日に渡って読んだ上で話し合うというやり方をしています。



それから“読書甲子園”というものがあるじゃないですか。朝日が主催しているのかな。それに最初のころに絡んだのですけれど、今は姜尚中さんが絡んでいるみたいです。一週間くらいまえに朝日新聞に出ていましたね。読書甲子園で、高校生がどういった読書体験をしているかということ語り合う場面があるみたいですね。

それから、これも高校ですが、千葉県にある市川学園という中高一貫校の校長先生がたいへん読書に強い関心をお持ちで、朝、授業が始まる前の三十分くらいを読書時間に充てる。それから図書館をできる限り開けるということで、かなり遅くまで開けている。生徒達には図書館にいるなら遅くまでいても良いということらしく、ずいぶん本を読んでいるようです。先日私も行って話をさせて頂きました。ところで、古典ってクラシックですよ。クラシックってどういう意味か知っている？

●ラテン語ですか？

◎一番もとをたどるとギリシャ語に戻れるのですが、普通はラテン語ですね。全然ね、全く予想外の意味なのです。船。船と言っても、特に軍船。つまり、ギリシャ・ローマの時代の都市国家って、みんな地中海の沿岸域にちらばっているわけです。だから敵と戦うときに船が大事なのです。その船のことを言います。なぜ、それが古典という意味になったのか想像がつかますか？

●一番大切なものだったからですか？

◎そうそう、そうなのです。当時の国家にとって一番大切なもの。特にクラスという言葉、階級という言葉もそこから関連しているので、ちょっと悲しいような話だけど、要するにローマならローマの市民、カルタゴならカルタゴの

市民、アテナイならアテナイの市民として、国に、公に、都市国家に何が貢献できるかといった時に、お金を持っている人は、船を一艘国に寄付できるわけです。だから、国にとって大切な市民、大切な層、クラス、国にとって大事な層という意味を持つようになってきたのです。そうすると、あまり大切じゃない層というのは何かというと、それがプロレタリアートなのです。今は労働者階級という意味で使われていますけれども、プロレーというのは実はもともと息子という意味です。つまり、国に対して、この場合、女性は残念ながら勘定に入っていないけれども、男の子、国を構成していくために必要な市民である、男性の市民を国に残すことしか、国に対して貢献できない人、それがプロレタリアートなのです。ちょっと悲しいですね。次世代の市民を残すことでしか都市国家に貢献することができない層、それがプロレタリアートという言葉になって残った。だからまさに国にとって誰が大事か、何が大事かということからきたというふうに言われています。

●アスペンで使われている古典のテキストは、どのように選んでいるのでしょうか。また、全てを読むのは難しいと思いますが、使う部分はどのように抜粋しているのでしょうか。

◎しばらくはこれで行こうというものを選んで、また色々と反応をみて、高校生達のアンケートを必ず取っていますから、アンケートの集積の中から変えるべきものは変えようという態度で臨んでいます。

予め三カ月以上前、夏休みに参加者にテキストを送ります。とにかく全部読んで来いと。その場であまり質問はしないで、質問があるなら自分で調べなさいということです。でも、このテキストのこの部分にはこう書いてあって、自分はこの点に関しては非常に強い感銘を受けたとか、ここはこう書いてあるけど自分にとってはとても心外であるとか、そういうところがいくつも出てくる訳です。そういうのを控えておいて、もうちょっとこの人数より多い、倍くらいの人数のラウンドテーブルで、お互いに三分以内で、この箇所について自分はこう思ったとかここが大事だと思ったとか、ここはなんでこんなことが書いてあるか分からないとかいうようなことを言い合う。そうすると、全く違う感じ方をした人もいるし、そんなところが大事だと思わなかった人もいる訳です。色んな人が色んなことを考えて、同じものを相手にしているのに、色んなことを考えているのだということが分かってきて、自分自身が広がっていく。対話

を交わすことで自分自身が広げられる。そんなことを心がけてやっています。

●自分が今まで経験しなかったことを広げるということにもなりますよね。

◎もちろんそうです。ただ、それをやるためには自分もそこに参加しないと、自分も考えないと自分が考えていることを相手に話すことも磨かれていないといけないと思いますので、人から何か受けるだけでなく、自分もそこに積極的に参加しているということが大事だと私たちは考えている。

●経験の相互共有ということですか。

◎そうですね。そうですね。まさにそうですね。

●村上学長が今迄読んできた中で、英和生に限定せず、私たち若い世代に読んで欲しい本を、是非一冊教えてください。

◎それはたくさんあるんだな。(笑) 例えば、今の若い人はあまり読んでいないと思う、先に触れたマンの『選ばれし人』やロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』。特に鈴木・辰野訳でお読みになると、ちょっと世界が広がるのではないかなと思います。ジュール・ロマンというフランスの近現代の作家で『プシケ』という作品があります。これは女性が主人公になっている小説です。こういうのを今の大学生がどんなふうに取り取るかちょっと関心があります。

私が言わないと絶対読まないだろうなという本、言っても読まないかもしれないけど、みなさんカントなんて敬遠するだろうけど、あるいはデカルトでも『方法序説』³⁴でも良いです。ヨーロッパの哲学というのは、いったい何を問題にして、どういうふう人間と対面しているかということを知るためには、デカルトの方が読みやすいと思う。特に最近、谷川さんって女性の方が訳された岩波文庫は大判の文庫で、その中にも入っていますけど、谷川さんの『方法序説』はとても読みやすくていい訳だと思います。同時に道元を読みなさいって言うの大変かなと思いますが、『正法眼蔵』³⁵も現代語訳がありますね。『奥の細道』³⁶は読みました？

●「夏草や兵どもが夢のあと」という句しか記憶にありません。

◎それは最後の方ね。本当の最後の方だけ。

●国語の教科書に載っていたのですが、その箇所しか読んでいません。

◎国語の教科書って馬鹿に出来ないのですよ。国語の教科書でやったな、というのを“やったな”で終わらせないで、一度全部読んでみようかなと。『奥の細道』でさえ現代語訳がありますからね。もちろん『源氏物語』³⁷を読んでもいいと思います。国語の教科書に載っていたでしょ？

●高校の国語の教科書に載っていました。

◎これも現代語訳がたくさんあります。私は与謝野晶子の訳が好きだけど、寂聴さんの訳もあるし。

あれは人と人との関係を、一度自分で読みながら図表にしていくと分かりやすくなる。さっきの『アンティゴネー』だって、オイディプスがお父さんで、イオカステーとオイディプスとの間にアンティゴネーが生まれるのだけど、上にお兄さんがいて、これがまた戦い合ったりして。そのオイディプスは自分のお母さんを妃にするというんでもないことをやって、自分で目をつぶってしまうわけですけど、それが「エディプス・コンプレックス」という心理学の中でも使われる言葉になる。そういう複雑なことも、一度図表にしてまとめてみると手助けになる。読んでいくうちに、“何だ、そういうことか”と先に進められることがありますので、ちょっと老婆心ながら。

●私は、中学の時にどうしても読みたくて買った本が当時は理解できなくて、二・三年経つてもう一度読んだら理解できたという経験があるので、難しい本はしばらくしてから読むようにしています。

◎自分が育っていく、敢えて成長するとか変わるとは言わなくても良いのだけど、変わっていく中で、昔読めなかったものが読めるようになるというのは充分に有り得ます。それからこれは哲学とか難しい話になるけど、さっきデカルトの話をしましたね。これは私の体験ですが、高校から大学にかけて、カントとかヘーゲルとかいっぱい読まなくてはならなくて読んだ。今だって本当に分かっているかどうかは別にして、とにかく読んで納得できたということまでなかなかいかない。その時に字面だけ追って、ある程度分かったという感じで、そこまで到達できないというもどかしさがある、ということはいまおこるわけです。その時、同じジャンル、もちろんデカルトとカントは随分時代も違うけど、デカルトは一六五〇年に死んでいるし、カントは十九世紀の初めに死んでいるわけだから、まるで時代は違う。例えば他にもいて、これは私個人の経験だけど、デカルトの『方法序説』を読んだ時に、おそらく谷川さんの訳ではなかった。たぶん落合先生という有名なデカルト学

者がいらして、すごく分かりにくい訳でした。その落合訳を読んでいて、かなり納得できたという経験をした。そしてカントに帰ってみたら、なんだ、カントの言っていたことは結局こういうことなのじゃないかと。つまり一つのものが突破口になって、それに近いもので、難しいと思ったり、ピッタリにないと思ったりしていたものが、分からないと思っ
ている事が、するすると謎が解けて行く、というような経験をすることがあると思います。諦めずに、むしろ色んなものを読んで、自分にぴったり分かったと、肌身に沿うような感じで分かる。そういうものが一つ二つと増えていくと、そこからどんどん増えて行くという経験をすると、それは大事な経験だと思ふ。

●『あらためて教養とは』を読ませて頂いて、教養と言うのはただ学問があるだけではなく、少し古い言葉ですが市井(しせい)の方々も持っている方は持っていたという文がありました。年配の世代から見たら、現代の私達には教養が欠けているということも言われます。もし先生が私達に身につけて欲しいという教養があるのでしたら、どういふものなのかを教えてください。

◎なるほど。大変重い質問なのだけど。実はあの本でもちよつと書きましたが、私達、貴方達からみたらお祖父さんの世代が、もろにそれを被っているのですが、私が小学校三年生の時に敗戦でした。それまでは、戦前の、小学校半分だけど、歳としては十歳ぐらいまでの間は、戦前の教育的な空気の中で生きてきたわけ。小学校も幼稚園も含めて。そこで教育の内容が全く、ガラッと変わったわけ。それで、今迄信じていた、或いは良いと思ってきた、或いは目指すべきであると思っていたものが、全部ひっくり返されて、そうではなくてこっちが良いという言い方をされた訳です。言い訳になるかもしれないけど、私達の世代は、我々より前の世代の人達が我々の世代に、こういうふう生きるのだよ、こういうことに価値があるのだからこれを目指しなさい、というようなことを割合強く言葉と行いで示していた時代だった訳です。ところが、そうしてはいけないという、いわゆる戦後民主主義といわれているものの中で、そういう風に、古い世代が新しい世代に対して自分たちの信じている信念体系だとか、価値観といったものを、押し付けてはいけないという訓練を戦後に受けた。その為に、特に我々の世代から暫く、十年ぐらいの世代はみんなそうだと思うけど、子供達とか教育の場面でも、自分達が持っている、そういう枠組み

みたいなものを、君達もみんなこれでいってね、と言えない中で過ごしてきた側面がある訳。だから責任は我々にあると言っても良い。さっき、若い年代に教養がないって言われ方があると言っていたけれど、その責任はむしろ我々にあると思います。でもやはり本当は、その上の世代っていうのは、ある程度次の世代に対して、自分達が信じていることはこれなんだと、伝える義務はあると思っています。これだけ年を取ったから、思うようになりました。だから今の若い人達に、やはり人間として、世代を超えてとなった時に、本当にそれが良いかどうかは分からないけど、人間としてある種の、私はあの本の中で、「decency(ディセンシー)」という言葉を使っているけど、これは私が使った訳ではなく、ノーベル文学賞受賞者、大江健三郎さんが使った言葉なのだけど。大江さんは、ある新聞の評論で、最近の若い人は「decency」を失っているという表現をなさった訳です。私もそれはそうだと思うけど、大江さんの言い方の中には、今私が申し上げたような、自分に戻ってくるような問題の責任のあり方というものが全く見られなかったので、私は少し大江さんに対して怒った訳です。「decency」というのは、何と訳したら良いか分からないから大江さんも英語を使ったのだと思いますが、いくつか訳があります。一つは「慎み深さ」みたいなもの。もう一つは「分相応の」という感じがある。例えば、「分相応の」ということは、戦後民主主義の中では考えてはいけなかったものでした。これは反発を買うかもしれないけど、「女性は女性らしく分相応に」って言ったら皆さん怒るでしょ？

●はい。ええ。

◎つまり、自分の分を弁えて、その中で考えて判断し、行動しましょう、という事にしてしまうと、やはり少し問題がある訳です。だけど、それがあつた種の「慎み深さ」というものになった時。例えば、私の体験から言えば、今やもうテレビジョンは誰かが何かを食べているところを、ほとんど永久に映しているようなところがありますが、人前で物を食べるということは、慎みを欠いたものであるという躰を受けた人間なのです。食べた物に関して「おいしい」と言ったり「まずい」と言ったりすることは、これも作った人に対する礼を失することにもなりうる行為な訳で、言うべきではない。例えば、何か聞かれた時には、「おしく頂いています」ぐらいで、それ以上には言うべきではないという様な。これは今にあてはめるべきと言うつもりはないですよ。けども、そういう日常の中で、ある種の慎み。ここか

ら先はやりたいけど、でも恥ずかしいとかおかしいとか。何か自分の中に決めた限度、それが「分」なんです。自分の中で、これを超えることはやらないでおきましょう。超えること、それを私は「矩(のり)」、「規矩(きく)」って言葉を使うけど、そこから先は仮にやりたいとしてもやらないでおきましょうという線。それは人によって違い、時代によっても違い、当然あるもの。どの社会に行っても、その限界を作らない人間って、たぶんいないのではないかと思います。それは自分の中でちゃんと作っていかないとならないのではないかとこれは伝えたい。社会の中で、ひどく自分の行動を縛るような、外から押し付けて入ってくるようなものであれば、それは考え直して当然良いと思うけど、少なくとも自分自身で、納得のいく所で、ここから先は自分が超えないのだというものは、どこか自分の中で作っておくことは、人間として一番大事なことはないでしょうか。それが「decency」という言葉の持っている本来の意味なのだと思います。例えば、それは本を読んでも分かります。もちろん時代によっても違ってしまいますからね。

何故そんなことを言うかという、人間って変な動物で、これは若い女性を前にして、あまり適切な話題ではないけど、「性」の問題を考えても、普通の哺乳動物は、性行為が成り立つというのは、例えば、犬でも猫でも羊でも牛でも、メスの方が性行為のできる期間が決まっています、その期間だけしか通常性行為というもの成り立たないのです。それはつまり本能と言うべきか、そういう風に創られているのです。それは壊されないのです。性でなくても殺戮欲なんていうのも、ライオンだって、のべつ目の前を通ったシマウマをひたすら追っかけて殺してしまうということは決してない。お腹が空いてどうしてもという時だけ襲って食べて、お腹がいっぱいになったらそれで寝てしまう。ところが私達は、アメリカの場合には、バッファローをほとんど絶滅寸前まで殺し尽くしたわけです。今は少し戻ってきましたけど、それから、同種間殺戮というのも普通しないのですが、人間同士が一発の爆弾で十万人殺してしまうとか、焼夷弾攻撃で三十万の人が一挙に亡くなる。平気かどうかは分からないけど、やろうとなったらやるのです。これはローマ時代のことにしておくけど、ローマ時代の宴会というのは三時くらいから始まります。山海の珍味がテーブルの上に盛られていてひたすら食べる。お腹がいっぱいになると外に出て、喉の中に指を入れて胃の中から戻して、また席に戻って更に食べる、

というようなバカなことを平気でやっていた訳。他の動物は絶対やらないことです。ということは、人間は自然の中で決められた、ここから先はやらないってことを、割に平気で自分の意思で破る動物なのです。だから性行為でも三六五日できるかどうか知らないけど、いつでもしようと思ったときするといった雰囲気も今の世の中には一部ある。そういうことに対して、だったら自分でここから先はやりたくてもやらないというのを何か自分で作らないと、野放図にどこまでも欲望を追求してしまうような、可能性をもった特別な生き物が人間だということに気が付くと、やはりどこかでそういう限界点というものを作りましょうよと思います。

それは宗教的な社会だったら宗教が、ユダヤ教だったらモーゼの十戒があって、「汝殺すなかれ」って言われたら守る。神さまが命じたのだから、という限界の作り方もある。でも今の社会は、そういう外から与えられたものじゃなく、自分自身が考えているんなものを読んだり、聞いたり、経験したりしながら自分の中に、ここから先だけはやめておこうという限界点を自分で設けないと、それこそ人間として怖いですよということは、先輩として言えるのではないかと思います。自分の中で何かそういうものをつくる。ということをや心がけて欲しいかなというのが思いです。

●有難うございました。先生の著作を読んで皆さん今回のインタビューに臨んだと思いますが、実際に生の声でお話を聞くと、文字を読んでいた時には伝わらなかった事が、たくさん伝わってきて、先生の気さくなお人柄にも触れることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。本当に有難うございました。

◎そう思っただされば、私も有難いです。またどうぞ次の時間を作ってください。

●よろしく申し上げます。有難うございます。



【今回ご紹介頂いた本】

☆マークが付いている本は図書館に所蔵があります。

※1 特定の訳者、版のご紹介がないものは、新しい資料を優先して掲載しましたが、この他にも多くの版が存在します。

※2 所蔵状況は2012年12月現在のものです。

- 1『漱石全集(全29巻)』 / 夏目金之助(漱石)著, 岩波書店, 1993-2004 ☆
- 2『デミアン, 改版』 / ヘルマン・ヘッセ著; 高橋研二訳, 新潮社, 1988 ☆
- 3『魔の山, 改版(上・下)』 / トーマス・マン著; 高橋義孝訳, 新潮社, 2005 ☆
- 4『選ばれし人(トーマス・マン全集;7)』 / トーマス・マン著; 佐藤晃一[ほか訳], 新潮社, 1972
- 5『カラマーゾフの兄弟(全5巻)』 / ドストエフスキー著; 亀山郁夫訳, 光文社, 2006-2007 ☆
- 6『罪と罰(上・下)』 / ドストエフスキー著; 江川卓訳, 岩波書店, 2000 ☆
- 7『チボー家の人々(全11巻)』 / ロジェ・マルタン・デュ・ガール著; 山内義雄訳, 白水社, 1952 ☆
- 8『My gun is quick』 / Mickey Spilane, Curley, c1950
- 9『俺の拳銃は早い(スピレーン選集;4)』 / ミッキー・スピレーン著; 向井啓雄訳, 潮書房, 1956
- 10『Casino Royale』 / Ian Fleming, Penguin Books, c2004
*007シリーズの最初の作品
- 11『虹(ロレンス;2)』 / ロレンス著; 中野好夫訳, 新潮社, 1971 ☆
- 12『プシケ』 / ジュール・ロマン著(*『世界文学全集;76「ロマン;ジロドウ」青柳瑞穂訳, 講談社, 1979に収録されています) ☆
- 13『月と六ペンス, 87刷改版』 / サマセット・モーム著; 中野好夫訳, 新潮社, 2010 ☆
- 14『グスコブドリの伝記』 / 宮沢賢治著(*23『セロ弾きのゴーシュ』に収録されています) ☆
- 15『風の又三郎(宮沢賢治童話集;上)』 / 宮沢賢治著, 新潮社, 1961 ☆
- 16『雁の童子』 / 宮沢賢治著(*『日本児童文学大系;18「宮沢賢治集」』ほるぷ出版, 1978に収録されています) ☆
- 17『ありとこのこ』 / 宮沢賢治著(*『注文の多い料理店』

- 講談社, 2008に収録されています) ☆
- 18『月夜のでんしんばしら』 / 宮沢賢治著(*『注文の多い料理店』角川書店, 1996に収録されています) ☆
- 19『どんぐりと山猫』 / 宮沢賢治著(*『注文の多い料理店』角川書店, 1996に収録されています) ☆
- 20『飢餓陣営』 / 宮沢賢治著(*『銀河鉄道の夜(宮沢賢治童話集;下)』新潮社, 1961に収録されています) ☆
- 21『北守将軍と三人兄弟の医者』 / 宮沢賢治著(*23『セロ弾きのゴーシュ』に収録されています) ☆
- 22『春と修羅: 心象スケッチ(名著復刻全集近代文学館)』 / 宮沢賢治著, 日本近代文学館, 1969 ☆
- 23『セロ弾きのゴーシュ, 改訂新版』 / 宮沢賢治著, 角川書店, 1996 ☆
- 24『シラノ・ド・ベルジュラック』 / エドモン・ロスタン著; 辰野隆, 鈴木信太郎訳, 岩波書店, 1983 ☆
- 25『かもめ』 / チェーホフ著(*『チェーホフ(筑摩世界文学大系;51)』筑摩書房, 1971に収録されています) ☆
- 26『三人姉妹』 / チェーホフ著(*『チェーホフ(筑摩世界文学大系;51)』筑摩書房, 1971に収録されています) ☆
- 27『かのやうに』 / 森鷗外著(*『鷗外近代小説集;6)』岩波書店, 2010に収録されています) ☆
- 28『アンティゴネー』 / ソポクレーズ(*『ギリシア悲劇全集;3)』岩波書店, 1991に収録されています) ☆
- 29『エネアデス』 / プロティノス(*『プロティノス;2』中央公論社, 1987に収録されています) ☆
- 30『創世記(旧約聖書;1)』 / 月本昭男訳, 岩波書店, 1997 ☆
- 31『現代語訳文明論之概略』 / 福澤諭吉著; 伊藤正雄訳, 慶応義塾大学出版会, 2010 ☆
- 32『学問のすゝめ』 / 福澤諭吉著; 小室正紀, 西川俊作編, 慶応義塾大学出版会, 2009 ☆
- 33『実用的見地における人間学』 / カント(*『カント全集;15)』岩波書店, 2003に収録されています) ☆
- 34『方法序説(ワイド判岩波文庫;180)』 / デカルト著; 谷川多佳子訳, 岩波書店, 2001
- 35『正法眼蔵』 / 道元(*『正法眼蔵: 読解愛蔵版(全10巻)』筑摩書房, 2003-2005に収録されています) ☆
- 36『奥の細道』 / 松尾芭蕉著; 上野洋三編, 和泉書院, 1999
- 37『源氏物語: 全訳(全3巻)』 / 紫式部著; 与謝野晶子訳, 角川書店, 1971-72 ☆